

楽 西

～ らくさい ～
No.126
令和3年
8月10日発行

●● 社会福祉法人
●● 京都視覚障害者支援センター

〒610-1111 京都市西京区大枝東長町 1-67

TEL: 075-333-0171 / FAX :075-333-0172

✉→info@kyo-ssc.com

URL→https://www.kyo-ssc.com/



点字印刷物がみなさんに届くまで

～点字製作の流れをご紹介します！～



パソコン入力

テキストデータを点字変換ソフトを使って点字に変換し、紙面を確認しながら職員が点字データを作成していきます。読者の方々に必要な情報が漏れることなく伝わるよう、「読みやすい・分かりやすい」を意識しながら作成していきます。



校 正

利用者さんの触読校正・紙面との照らし合わせを経て、製版データがようやく完成します。ひと文字ひと文字丁寧に確認していきます。



原 版 折 り

塩ビ版を人力で、補助具を使い少しずつ半分に折っていきます。なかなかの力仕事で大変です！



原 版 通 し

点字印刷機を使い圧力をかけてさらにきっちりと原版を半分に折ります。何度も何度も通します。



ガムテープ貼り

製版の時に原版が動かないように、1カ所をガムテープで留めます。目印の役割もあります。



油塗り・拭き

製版時に原版と製版機がくっつかないように油を塗ります。塗り残しがないよう1枚1枚丁寧に塗っていきます。最後に余分な油の拭き取りをします。油でベタベタなのはNG！

～以上の工程を経て原版がようやく完成です！～



製 版

パソコンから製版機へ完成したデータを送り、製版開始。
原版が出来上がってもすぐに印刷は始めません。
再度紙面との最終の読み合わせ校正を経て、ようやく印刷へと回ります。



印 刷

洛西寮には4台の点字印刷機があります。
それぞれの印刷機に利用者さんが
「入れ」（用紙を原版に挟んで印刷機に通す）と
「取り」（用紙を原版から抜き取って箱に入れる）
に分かれて二人一組となり、声を掛け合いながら印刷をしています。
1日立ち仕事で大変ですが、
納期に間に合うようにみんな真剣に頑張っています。



全市版（市民しんぶん）で約16,500枚、区版（区民しんぶん）で
約6,500枚印刷します。
気の遠くなる数ですが、毎月1枚1枚丁寧に印刷しています。



製 本

ホッチキス留め（製本作業）は、
点字で膨れあがった用紙を揃えるのが難しい作業ですが、
ずれないように気をつけながら職員が製本していきます。



テープ貼り

利用者さんがホッチキスを留めた部分4カ所に製本テープを貼り付けて、
読者の方が触れても危なくないよう保護します。



宛名シール貼り

ズレないように補助具を使いながら発送用封筒に宛名シールを
貼っていきます。
差出人がわかるように、封筒にも点字を打ちます。



発 送

利用者さんが一部ずつ向きを間違えないように丁寧に封筒に入れ、
自動のテープカッターを使用しながら封をしていきます。
発送数を最後に確認し郵便局に届けます。

～こうしてようやく、みなさんのお手元に届きます！～

ピアカウンセリング

ピアカウンセリングとは

「同じ悩みを抱えた当事者同士が対話を重ね、お互いに悩みを解決できるよう支え合うこと」

ピア(peer) = 仲間、同じ立場の人

カウンセリング = カウンセラーと相談者が対話を重ねる中で、
相談者が主体的に悩みを解決できるよう支援するプロセス

洛西寮では月に2回、ピアカウンセリングの場を設けています。

今回は、そのカウンセリングを担当していただいている松永信也理事に
想いを綴っていただきました。



洛西ニュータウンで暮らし始めてもう40年が経過した。当時の僕は大学の社会福祉学科を卒業して児童福祉施設で働いていたが、まだ洛西寮の存在は知らなかった。40歳の頃失明し自分自身が視覚障害者となってから、その存在とその重要性を認識するようになった。視覚障害者にとって「働く」ということは大きな壁であったし、僕自身も洛西寮の利用を考えたこともあった。地域の視覚障害者団体の役員をするようになって、洛西寮へ行くことも多くなり利用者との交流も始まった。紆余曲折を経ながら長い時間の関わりとなった。

その後、洛西寮の母体である京都視覚障害者支援センターの理事を拝命して、関わりは一気に大きくなっていった。その経過の中で常務理事もされていた先輩からピアカウンセラーの話を頂いた。僕は自分自身の微力さを自覚しながらも喜んでお引き受けした。敬愛する先輩からの言葉がうれしかった。「視覚障害の仲間の豊かな人生のために」、先輩の思いはまっすぐだった。

毎月2回、3階の会議室を使って実施している。一人30分が一応の目安だ。強制するようなことではないので、希望された方が対象だ。毎月のように利用される方もおられれば、思い悩んだ時だけ来られる方もおられる。ただ誰かに話を聞いて欲しいというような場合もある。一对一の時間はのんびりと流れていく。笑いが起こることもあれば、それぞれの人生を振り返ることもある。重たい現実には立ち尽くすこともある。とりとめのない会話とささやかな時間、どれだけの意味があるのか自信はない。ほんの少しでもいいから、日々奮闘しておられる職員のために、施設のために、そして利用者一人一人の幸せの一助になればと心から願っている。

～どんな時でも相談者の想いに寄り添います～

当法人では、創立以来、京都府から委託を受けている「京都府失明者巡回生活指導員派遣事業」があります。見えない、見えにくいなど、視覚についてお困りの方の所へ訪問し、お話を伺っています。京都市を除く京丹波町から南の地域を、2人の相談員で対応しています。

読み書きの困難な方にとって、文書での情報を得ることは難しく、福祉制度や便利グッズ、地域での催し、同じ悩みを持つ当事者団体の存在など、必要な情報を思うように手に入れることができません。特に、関係機関とのつながりがなく、点字や音声パソコンが難しい方は、より情報が少なく、制度があること自体ご存知ない方もおられます。過去にはこの巡回がきっかけとなり、洛西寮の利用へとつながった方もおられます。

コロナ禍での社会情勢は、訪問相談活動にも大きな影響がありました。相談依頼を受け連絡をさせていただきますが、自宅で相談を受けたいという想いの一方で、感染リスクを懸念されている方については、訪問の延期や電話のみの対応としました。

また、継続した相談者の中には感染リスクや対策について意識されない方もおられますので、体温測定や消毒、マスク着用のお声かけをしながら、業務を進めさせていただきました。

相談事業はコロナ禍だからといって活動自粛とはなりません。この様な不安な社会情勢であるからこそ、相談の必要性は高くなると思われます。外出の機会が減り、家にこもってしまいがちになり地域とのつながりが薄れてしまうケースや、近年ではご高齢で独居、または高齢者夫婦の訪問が多くなり、そういったケースは特に訪問相談の必要性を感じます。感染リスクは払拭できない状況ですが、感染対策についても協力をしていただきながら相談活動を行なっています。

コロナ禍の状況がワクチンによって好転することに期待しつつ、相談者の想いに寄り添って、必要とされていることをしっかり傾聴し、真摯な対応をこれからも心がけていきます。

たとえばこんな相談をよくお受けします

- ① 白杖の説明と交付申請への支援、歩行訓練について
- ② 日常生活用具（拡大読書器・プレクストーク等）の紹介や給付申請手続き等のアドバイス
- ③ 家族や近隣の人間関係、日常生活での不安等への心理更生
- ④ 施設利用や介護保険事業者との連携による生活基盤の構築
- ⑤ 地域の活動や、関係団体・施設の紹介
- ⑥ IT 機器の活用、ガイドヘルパー利用について
- ⑦ 家庭での視覚障害への対応、生活訓練について

継続は力なり！そして感謝！



らくさい治療院の朝は、スタッフ全員で治療院の清掃からはじまり、朝礼を終えて、患者様の施術に入ります。治療院のスローガンは京都一の技術集団になること。そしてミッションは、患者様及び地域の皆様の健康の保持、増進に努めることでもあります。施術者はそれぞれに個性があり、母指の形や大きさ、関節の柔らかさや得意な手技が違います。

そこで治療院では施術者の個性を生かしながら、目指す方向を一つに定めています。それは、患者様がほぐして欲しい凝りを捉え、そこにアプローチする技術の習得にあります。なんてシンプルでしょうか。ただ、この技術はそう簡単に身に付くものではありません。朝の清掃、朝礼、施術等、すべて自分と向き合うことになり、自己理解を深めることにより、心と技のバランスがとれるようになるのです。

治療院では、スキルアッププランを作成し、1年後の目標を立て、それを達成するためにそれぞれが努力をしています。そして、年1回スタッフが研修会を実施しています。

さらに、お互いの身体のメンテナンスを目的にスキルチェックを行い、今の課題を明確にし、技術向上を目指しています。「何のために」「誰のために」を追求することで、最後には自分に還ってくることを、スタッフは理解しつつあるのです。



このような何でもない普通のことを継続してやっていくことがどれだけ大変で重要か。まさに継続は力なりですね。そして、日々の精進が技術となり、自分自身の成長につながり、患者様の心と体をほぐす結果となり、安心や信頼とつながるのだと実感しています。

施術が終わり、患者様が帰りがけに何とも言えない声で、「楽になりました」と声を漏らしたあの瞬間は、これ以上ない喜びであり、感謝の気持ちしかありません。また今日も、患者様の生活の質が向上しますように、心を込めて施術します。

今年もマスクが外せない夏となりました。

マスクを着けると皮膚からの熱が逃げにくくなったり、気づかないうちに脱水になるなど、体温調節がしづらくなります。暑さを避け、水分を摂るなどの「熱中症対策」と、マスク・換気などの「新しい生活様式」を両立させて、楽しく元気に夏をすごしましょう。

さて、ここからは洛西寮における、利用者さんの健康管理の取り組みについてお話させていただきます。主なものとして個々の疾患に応じた健康観察、服薬準備、通院介助、健康相談、毎月定期的に利用者さん全員の血圧・体重測定、体調チェックを行う寮内健診を行っています。そして月に一度は嘱託医の訪問診察があり、利用者さんの健康維持に努めています。

また昨年度から、看護師は生活支援員の役割も担っています。その時間を用いて個別の運動プログラム、歯磨き指導、シーツ交換の練習をします。こういった関わりの中で、ふいに利用者さんから胸に秘めている思いや本心を耳にすることがあります。実はその中にこそ、本当に必要な支援があるのではないかと感じています。思いを汲み取り、個性を活かしながら、看護師としての知識や経験をフル活用して、洛西寮での生活がより充実したものとなるよう今後も取り組んでまいります。

何はともあれ健康第一です。体の健康と心の健康、二つのバランスがとれてこそその健康です。心が不安定になりやすいコロナ禍においては、特に人とのつながりを感じられることが大切なのではないのでしょうか。

「雲の上はいつも晴れ」という言葉どおり、コロナ収束後に行事やイベント等を元気いっぱい楽しむ利用者さんの笑顔を思い浮かべながら、皆で声を掛け合い、しっかり前を向いて進んでいきたいと思います。

新型コロナウイルス対策とワクチン接種

- ①京都市からの依頼に基づき、クラスター発生防止を目的とした、職員対象の抗原検査を週2回、約2ヵ月間行い、一人の陽性者も出ずに経過しました。
- ②6月より嘱託医院や近医で65歳以上の利用者さんのワクチン接種が始まり、7月と8月に65歳以下の利用者さん、職員対象の施設内集団接種が行われました。

副作用や筋肉注射の痛みを心配され、接種前は皆さん緊張の面持ちで順番を待っておられましたが、接種後「インフルエンザの注射より痛くなかった」「大丈夫やった」とホッとされていました。

1回目ということもありますが、翌日は多くの方が注射部位と肩を上げた時の痛みがあったものの、いずれも症状は軽いものでした。2回目の接種後もしっかり体調観察を行いました。以前より少し安心感はあると思いますが、今後もできる限りの感染対策を行い、万全を期すよう努めてまいります。



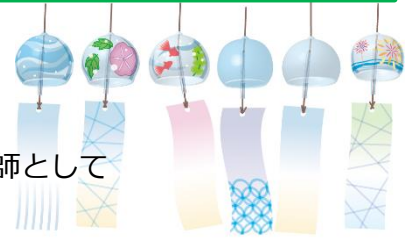
新しい仲間たち



盲人ホーム美鈴 伊藤聡哉さん

今年の4月からマッサージセンター美鈴であん摩師として
施術させていただいています。伊藤と言います。

多くの患者様に軽快したと仰っていただけるような施術ができるように、
日々、練習したり、試行錯誤しています。よろしくお願いします。



らくさい作業所 小林夏二さん

徳島県小松島市出身。51歳。183cm。中学の時はバスケットボール部。
テレビは野球、ドラマ、バラエティーなどを見ています。
マイペースでやっていくので、よろしくお願いします。



らくさい作業所 山口和真さん

山口和真です。京都市立西総合支援学校から来ました。
好きなことは、バスケットボールと野球です。

ご寄附・ご寄贈 ※1月～7月（五十音順・敬称略）

以下の方々より、ご寄附・ご寄贈を頂戴いたしました。ありがとうございました。

ご寄附（合計 28,200 円）

片山千恵子・友永満子・西牟田さち子

ご寄贈（8件）

秋田俊子・出原恵子・加藤純・河野泰治・鈴木綾・東窪千代松・人見佐知・平井多津子

●●● お知らせ ●●●

今年度の洛西寮まつりは
新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮して
中止とさせていただきます。

月編集後記月

新型コロナウイルス感染症は入所施設にとっては脅威でした。1人の感染者が出ればクラスターとなるのは避けられないと思います。ここまで1人の感染者も出さずにやってこられたのは、皆さんの意識の高さのおかげだと思います。記事にもあったように、利用者・職員のワクチン接種が済んで一安心です。もちろん、ワクチンは絶対ではありませんので、今後も感染対策は継続していきたいと思います（T）